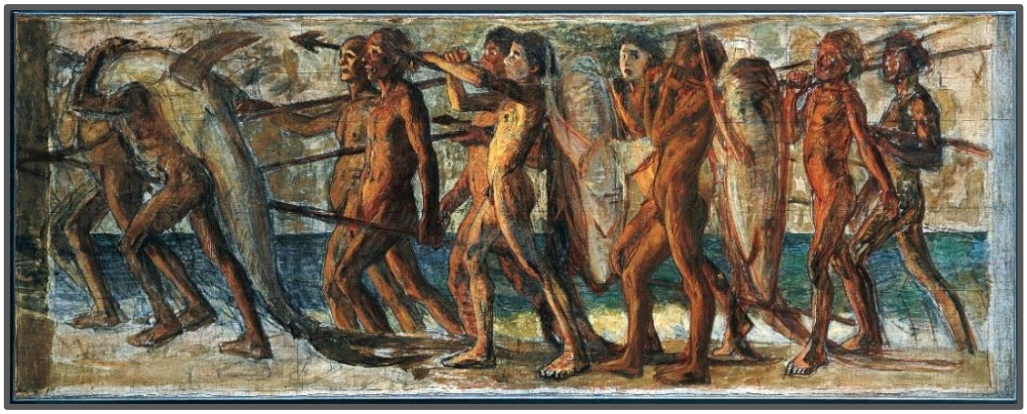
B-1 画家に愛された神話のふるさと

館山最南端の布良(めら)は、マグロはえ縄船発祥の漁村であり、房総開拓神・天富命(あめのとみのみこと)が上陸したといわれる神話の里。女神山・男神山がそびえ、布良﨑神社の2つの鳥居からは富士山を拝むことができる。きらきら輝く大海原は、人の心を　惹きつけてやまない。

青木繁が『海の幸』を描いたことから、布良は美術界の聖地と呼ばれ、多くの画家や文人墨客が訪れ素晴らしい作品を生み出している。1997(平成9)年の人気テレビドラマ『ビーチボーイズ』のロケ地としても知られ、今なお多くの人が訪れる。



青木繁　『海の幸』　石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリヂストン美術

◆青木　繁　＝夭逝の天才画家＝　1882(明治 15)～ 1911(明治 44)

福岡県久留米生まれ。東京美術学校在学中に『神話画稿』で白馬会賞を受賞。卒業した1904(明治37年)夏、画友の坂本繁二郎、森田恒友、恋人の福田たねとともに布良を訪れ、小谷喜録宅に約40日間滞在した。

もともと神話に造詣が深く、エネルギッシュな神話の里でインスピレーションを受け、多くの作品を描いた。代表作『海の幸』は日本で最初に重要文化財となった西洋画であり、多くの画家が影響を受けている。2017(平成 29)年、仏パリ展覧会に出展し、国際的な再評価を受け、注目されている。

後方から4人目でこちらを向いている白い顔は、恋人・たねだといわれる。翌年、たねとの間に幸彦が誕生するが、未入籍のまま2歳で別れ、最後は放浪の末、28 歳で夭逝した。幸彦は後に『笛吹童子』で有名な音楽家・福田蘭童となる。蘭童の子は石橋エータローとしてクレージーキャッツで活躍の後、料理研究家に転身した。 ➡p.17

同郷でブリヂストン創業者の石橋正二郎は、青木繁の作品散逸を危惧していた恩師の坂本繁二郎の願いを叶え、石橋財団を設立してそれらを収集し、石橋美術館・ブリヂストン美術館を開館した。

●青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅（こたに）　（館山市指定有形文化財）

房総の漁村を代表する平屋建て寄棟造りの分棟型住宅。1889（明治22）年の大火後の建築と考えられており、洋釘が使われている。青木繁は4人で奥二間に滞在し、『海の幸』を制作した。

江戸時代から続いた漁家で、明治期は船主や仲買等を生業としていた。当主・喜録は、教育や 村政にも深く携わり、帝国水難救済会布良救難所の看守長でもあった。 ➡ p.16

近年の水産業衰退に伴い少子高齢化が進んだため、地域活性化を目ざして「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」が設立された。小谷家住宅を美術界の聖地として後世に残そうと、全国の著名な画家らが設立したNPO法人青木繁「海の幸」会（大村智理事長）と連携し、保存基金を創出してきた。2年間の修復工事を経て2016（平成28）年に青木繁「海の幸」記念館・小谷家住宅として公開が始まった。

- □ 所在地：千葉県館山市布良 1256 番地
- □ 開館日：土・日曜日 （年末年始・お盆時期を除く）
  平日は 10 名以上の団体で見学予約可。
- □ 開館時間： 10～16 時 （10～3 月は 15 時まで）
- □ 維持協力金（入館料）：一般 200 円、小中高 100 円
- □ 友の会：年会費 2,000 円（特典：入館無料・会報送付）
  郵便振替 00150-6-616201 名義：青木繁「海の幸」記念館

●ブロンズ『刻画・海の幸』

館山市在住の彫刻家・船田正廣氏が、青木繁『海の幸』誕生から100年目に塑像を制作した。青木繁「海の幸」記念館の開館に合わせ、韓国の秀林文化財団（河正雄理事長）が戦後70年・日韓国交回復50周年を記念してブロンズを制作、美術友好の懸け橋として日韓5ヶ所に寄贈した。

- ・小谷家住宅（千葉県館山市）
- ・青木繁旧居（福岡県久留米市）
- ・韓国ソウル金熙秀記念秀林アートセンター
- ・韓国光州市立美術館分館河正雄美術館
- ・韓国霊巌郡立河正雄美術館

●青木繁「海の幸」記念碑

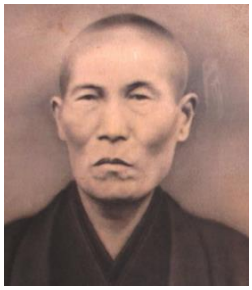
青木繁の没後 50 年を期して、当時の田村利男館山市長と、旧友の坂本繁二郎や辻永らが発起人となり、画家たちが基金を集めて、1962（昭和 37）年に阿由戸の浜に建立された。除幕式には、福田たねと青木の遺児・幸彦（後の福田蘭童・尺八奏者）が遺族として参列している。

設計は、ル・コルビジェなどの現代建築を日本に紹介した建築家の生田勉（東京大学教授）。そのイメージは、帝国大学建築学部の友人であった詩人の立原道造の詩『石柱の歌』や、当地が神話の里であることから神式の幣帛などにヒントを得たという。隣接していた館山ユースホステルの廃業に伴い解体の危機に遭ったが、地元住民の要望により解体を免れ、現在にいたる。碑の正面には伊豆大島、澄んだ日には利島・新島・式根島・神津島・三宅島‥と並び見える。

◆小谷治助（こたにじすけ）・喜録（きろく）　＝『海の幸』誕生を支えた小谷家当主、漁村のリーダー＝

1837（天保8）～1902（明治35）／1864（元治元）～1926（大正15）

江戸期から続く漁家で屋号は「きろく」。青木繁の滞在を世話した当主は小谷喜録。その2年前に逝去した先代の治助は、漁師頭、布良村会議員、合併後の富崎村会議員、富崎村土木委員・衛生委員などの要職を歴任。布良の大火や七浦沖漁船遭難、富崎村避病院設立などに寄付をして窮民の救済を図る。安房水産会富崎村委員、日本赤十字社の正社員、房総遠洋漁業株式会社の株主となる。神田吉右衛門とともに尽力した村政と水産業発展への貢献に対し、富崎村長・石井嘉右衛門から感謝状と銀杯が授与されている。 ➡ p.35

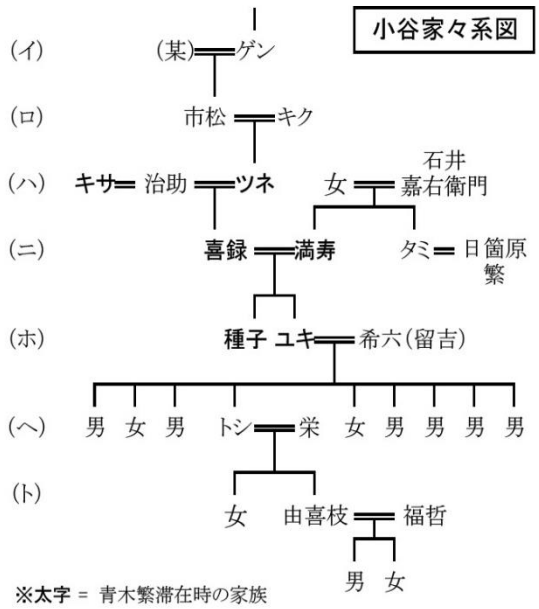


治助の長男・喜録は、布良小学校卒業後、上真倉村(館山市)の石井定吉に師事し、千葉師範学校教員の手嶋春治や小池民治について教育学を修めた。その後上京し、近代学問を幅広く学び、22 歳で布良小学校の教員(授業生)となる。後に富崎村助役や村会議員、大日本水産会会員、大日本帝国水難救済会布良救難所看守長、布良崎神社の氏子総代などの要職を歴任し、義父である村長の石井嘉右衛門を支え、村政を推進した。

1890（明治 23)年夏、水産伝習所の布良実習を世話したことへのお礼として、所長・関澤明清から感謝の書簡と『日本重要水産動植物之図』を贈られている。 ➡ p.32～34

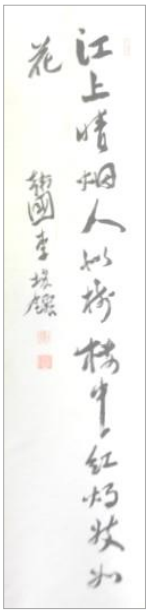
1904（明治 37)年夏、写生旅行で布良に来た青木繁ら4人を、40 日にわたり滞在した当時の家族は、喜録と妻・満寿、14 歳の長女・種子、6歳の次女・ユキ、義母のキサ。後に種子は千葉女子師範学校に進学し、東葛飾郡川間尋常小学校の教師となるが、21 歳で早逝。後年ユキが「客間に近づくことは禁じられていた。ある日障子に穴をあけて覗いたら、女の人の裸を描いていた」と語ったことが、小谷家では語り継がれている。

喜録の妻・満寿は、富崎村長石井嘉右衛門の長女であり、その妹タミは東京本郷の日箇原繁に嫁いでいる。最新の調査により、日箇原は美術文芸誌『月刊スケッチ』の発行編集人であることが判明した。



喜録は義弟の日箇原より、青木繁が将来有望な若手画家であると聞いて知っていた可能性もあり、そのために 40 日も客人扱いで世話をしたのではないかと推察される。

また、小谷家からは著名人の書画や書簡など重要な資料が多く見つかっている。なかでも、国会議員・満井武平の追悼句集や高等教育の教科書、韓国の王族・李埈鎔（イ・ジュニョン、第26 代高宗の甥）の書などは特に注目されている。



◆福田たね・蘭童　　＝青木繁の運命の女性と遺児＝

1885（明治 18）～ 1968（昭和 43）／1905（明治 38）～1976（昭和 51）

女流画家。東京の画塾・不同舎で青木繁と出会い、1904（明治37）年の布良への写生旅行に同行する。『海の幸』をはじめ青木の画中に多く描かれた女性。

青木の子を身ごもり、翌年二人で再び房州を訪れ伊戸の円光寺に滞在した後、たねの故郷（栃木県芳賀町）で未入籍のまま幸彦を出産するが、2年後に破局。

幸彦は成長して　尺八奏者・福田蘭童となり、『笛吹童子』で一世を風靡する。

青木の没後50年、布良に記念碑が建立された際、母子で遺族として除幕式に参列。たねは『50年前の追憶』を描いている。

『50 年前の追憶』
栃木県芳賀町総合情報館蔵

『青木繁 海ノ幸制作中に追思』
個人蔵

●マグロ延縄船と安房節、布良星

♪ アーエ　伊豆じゃ稲取　房州じゃ布良よ
　　粋な船頭衆の出るところ
♪ アーエ　船頭させても　とも取りゃさせぬ
　　押さえ　ひかえがままならぬ

布良のマグロ延縄漁は、江戸時代から栄え、明治初期には布良型改良漁船の建造に成功し、その名を全国に知られるようになった。厳しい冬季の沖泊まり漁は眠気と寒さの闘いで、励まし合うために歌われたのが「安房節」である。危険な漁は水難事故が絶えず、冬になると真南の水平線上に赤く輝く星（カノープス）は、亡くなった漁師の魂であるとされ、全国で「布良星」と呼ばれている。

●布良﨑神社

房総開拓神の天富命を祭神として祀る郷社。境内の丸い石垣は、マグロ延縄漁で栄えた頃、水揚げ地の稲取からの帰りに船の重しとして積んできた伊豆石である。明治期の祭礼では、若い衆が女装をして大神輿を担ぎ、海に入っていく「御浜下り」という神事があった。海から上がった男たちの灼けた肌は、衣がはだけて夕日に輝き、その姿がモチーフとなって『海の幸』の群像が生まれたのではないかと考えられている。

●相浜神社

大漁や海上安全を祈願し、元禄時代から続くといわれる曳船祭りでは、お囃子に合わせて、浪除丸（なみよけまる）と呼ばれる船型の山車の屋根の上で、女装した若い衆が踊る。

●青木繁の絵手紙

1904(明治 37)年 8 月 22 日、房州富崎村字布良・小谷喜録方に滞在中、青木繁は、親友の梅野満雄(福岡県八女郡三河村在住)に宛てに、4枚の絵手紙を出状している。布良・相浜・神戸・平砂浦の素晴らしさや、40 種にのぼる魚貝の名前を綴り、感動し高揚した様子が描かれている。また、精力的に取り組んでいる大作『海の幸』への自信もうかがえる。現在は、梅野満雄の孫夫婦が館長を務める長野県東御市の梅野絵画記念館が所蔵し、常設展示されている。

其後ハ御無沙汰失礼候
モー此処に来て一ヶ月余になる、
この残暑に健康はどうか？
僕は海水浴で黒んぼーだよ、
定めて君は知つて居られるで
あらうがこゝは万葉にある「女良」だ、
すく近所に安房神社といふがある、
官幣大社で、天豊美命をまつつたものだ、
何しろ沖は黒潮の流を受けた
激しい崎で上古に伝はらない
人間の歴史の破片が埋められて
居たに相違ない、
漁場として有名な荒つぽい処だ、
冬になると四十里も五十里も
黒潮の流れを切つて
二月も沖に暮らして漁するそうだよ、
西の方の浜伝ひの隣りに
相の浜といふ処がある、詩的な名でないか、
其次ハ平沙浦(イザウラ)
其次ハ伊藤のハナ、其次ハ洲の崎で
こゝは相州の三浦半島と遥かに対して
東京湾の口を扼(ヤク)して居るのだ、
上図はアイドといふ処で直ぐ近所だ、
好い処で僕等の海水浴場だよ、

上図が平沙浦、先に見ゆるのが洲の崎だ、
富士も見ゆる、雲ポツツリ、
又ポツツリ、ポツツリ！ 波ピッチャリ、
又ピッチャリ、ピッチャリ！
砂ヂリヂリとやけて 風ムシムシとあつく
なぎたる空！ はやりたる潮！
童謡 「ひまにや来て見よ、
平沙の浦わァー 西は洲の崎、
東は布良アよ、沖を流るゝ 黒瀬川アー
サアサ、ドンブラコッコ、スッコッコ！」

これが波のどかな平沙浦だよ、
浜地には瓜、西瓜抔がよく出来るよ、
蛤も水の中から採れるよ、
晴れると大島利島、シキネ島等が列を
そろえて、沖を十里にかすんで見える、
其波間を漁船が見えかくれする、面白いこと

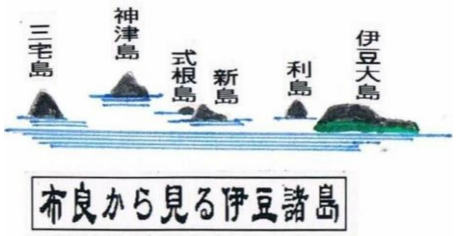
それから東が根本、白浜、野崎だ、
僅か三里の間、野島崎には燈台がある、
沖では クヂラ、ヒラウヲ、
カジキ「ハイホのこと」、
マグロ、フカ、キワダ、サメ、がとれる、
皆二十貫から百貫目位のもので釣るのだ、
恐しい様な荒つぽい事だ、
灘では、トビ魚(ヤゴ)、
カツオ、タイ、アヂ、ヒラメ、サバ、抔だ、
それから岸近くでは、小アヂ、タカベ、
クロダイ、カレイ、ボラ、抔だ、
磯辺ではタコ(大きいよ)、
イセエビ、メチダイ、メジナ、抔だよ、

夫れから浜磯では、モクツ、モク、アラメ、
ワカメ、ミル、トサカメ、テングサ、メリグサ、
アワビ、ハマグリ、タマガヒ、トコボシ、ウニ、
イソギンチャク、ホラノカヒ、サヽエ、アカニシ、
ツメッケイ(ツメガヒ)、抔だ、
まだまだ其外に名も知らぬものが
倍も三倍もある、また種族が
同じで殊類なものもあるのだ、
今は少々製作中だ、大きい、
モデルを沢山つかつて居る、
いづれ東京に帰へつてから
御覧に入れる迄は黙して居よう。

八月二十二日 満雄兄 繁

●青木繁の作品

布良では海の作品を多く描いており、荒々しい黒潮の波と岩が印象的である。絵手紙で「好い処で僕等の海水浴場」といっているアイド（阿由戸）の浜から見て、真正面に　伊豆大島、その左の小さな正三角形の島影は利島。2つの作品はパノラマになっている。



『海景（布良の海）』　『海』　石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリヂストン美術館）蔵

『わだつみのいろこの宮』
石橋財団アーティゾン美術館（旧ブリヂストン美術館蔵

『わだつみのいろこの宮』は、布良滞在中に海女メガネを借りて海に潜り、翌年の再来訪時に再び潜り、2年後に長崎で器械式潜水を体験し、3年がかりで構想したと自ら「国民新聞」に発表している。しかし後年、友人であった小説家の岩野泡鳴は『新小説』(1913)において、青木が生前「布良で潜水器を着て海底に沈んでみた」と語ったことに言及している。青木がなぜそれを公けにしなかったのか疑問が残るが、日露戦争下の要塞地帯であり、世話になっている小谷喜録が要職にあることへの配慮であったのかもしれない。

●円光寺の板戸と波の伊八

翌 1905(明治 38)年、青木は懐妊したたねを伴い、再度館山を訪れた。滞在した伊戸の円光寺では、本堂の板戸4枚に焼き釘を使い、荒々しい太平洋の海景を描いている。中央には岩に弾ける荒波、右手に富士山、左手に伊豆の島々。その構図は、円光寺本堂にある龍の欄間彫刻によく似ている。その作者は、「波の伊八」と　呼ばれる安房の彫物師、武志伊八郎信由で、葛飾北斎などにも影響を与えたといわれる。青木繁も感銘を受けたのだろうか。

青木繁 円光寺板戸　『海景』　個人蔵

波の伊八　『龍と波』　円光寺蔵

●布良を描いた画家たち

◆寺崎武男　＝房総神話を描いた画家＝　1883（明治 16）～ 1967（昭和 42）

1907（明治 40）年東京美術学校卒業後、農商務省実業講習生としてイタリアに渡り、フレスコ画（塗りたての漆喰に描かれた壁画）やエッチングを学ぶ。帰国後、1918（大正7）年に山本鼎（かなえ）らと日本創作版画協会を設立。壁画・版画・テンペラ・エッチング・水彩画・油絵など日本の美術史に多くの影響を与えた。1930（昭和5）年、日本人初のヴェニス・ビエンナーレ国際展に入賞。1949（昭和 24）年、焼失した法隆寺の金堂壁画のために国宝の輪堂一面に壁画を描き、明治神宮の聖徳記念絵画館には『軍人勅諭下賜ノ壁画』が収蔵されている。

先に移住していた彫刻家・長沼守敬を慕って館山を訪れるうち、気に入って別荘を建て、スケッチに来遊。戦争で東京の家が焼けて館山に定住、旧安房中学校(現安房高校)から美術講師として招かれ、海外仕込みの本格的な芸術を館山の若者たちに教えた。愛弟子には、 画家の伊東博子・井上忠蔵・ 松苗禮子らがいる。

神話の里・安房に惹かれ、安房神社や諏訪神社(館山市波左間)、下立松原神社(南房総市白浜町)などに、神話を題材にした作品が残されている。布良﨑神社には、鳥居型に額装された奉納画がある。

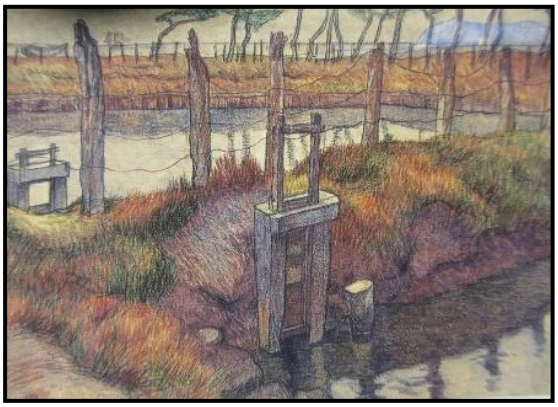
『天富命と忌部族の布良上陸』（布良﨑神社蔵）

◆倉田白羊（はくよう）　＝安房で児童自由画教育を実践　1881（明治14）～ 1938（昭和13）

浅井忠の親戚にあたり、少年時より絵画指導を受け、1901（明治 34）年東京美術学校卒業。1910（明治 43）年、安房に写生 旅行中、小谷英子と出会い結婚。館山に居住し、富崎小学校はじめ安房の児童自由画教育に尽力。千葉師範学校でも研究会を開催。1922（大正 11）年、自由画教育の先駆者である版画家の山本鼎に招かれて長野県上田に移住、日本農民美術研究所の副所長として活躍。その後も、全国で自由画教育を実践している。妻の兄は、渡米しカリフォルニア州モントレーで活躍したアワビ漁師の小谷源之助・仲治郎。 ➡ p.42

森田恒友や山本鼎、坂本繁二郎らが発行していた美術雑誌『方寸』5号では、夫婦で青木繫追悼特集の編集にあたっている。

館山市図書館所蔵の『水門』は、友人の青木茂（画家・『三太物語』著者）遺族の寄贈。同市の湊川河口と大房岬を描いたと推察される。背景の館山湾に浮かぶ船はその帆形から、日本初の洋式船「富崎丸」（石油発動機付帆船・豊崎政吉建造）と思われる。岡本一平の『一平全集』によると、倉田は石油発動機船でかじき鮪漁をやる半漁生活だったという。



『水門』　（館山市図書館蔵）

◆中村 彝（つね） 1887（明治 20）～ 1924（大正 13）

『海辺の村（白壁の家）』　館山中村屋蔵（複製）

茨城県水戸生まれ。幼くして両親兄弟を亡くし18 歳で結核を病み、1905（明治 38）年、北条町湊（現館山市）に転地療養。海でスケッチし画家を志す。その後も転地療養を繰り返しながら、白馬会絵画研究所で黒田清輝、次いで太平洋画会研究所で中村不折や満谷国四郎に師事し洋画を学ぶ。

1910（明治 43)年、再来訪し布良で描いた『海辺の村(白壁の家)』-東京国立博物館蔵- が、第4回文展で3等となる。病弱な彝に海外経験はないが、レンブラント、ルノワール、セザンヌ、 ゴッホ、ミレー、マネ、シスレー、モネ、ドガらの技法を独学し、模倣だけに終わらない独特な画法を確立している。新宿中村屋の創設者、相馬愛蔵・黒光夫妻に支援されて下落合（新宿）にアトリエを構え活躍した。相馬夫妻の長女俊子をモデルにして『少女裸像』『婦人像』などを 描くうちに、彼女を深く愛していくが夫妻に反対され別離。失恋と病苦のなか、1920（大正9）年には後に国の重要文化財となる代表作『エロシェンコ氏の像』を描き上げたものの、37 歳で死去。

保存運動によりアトリエは修復され、新宿区立中村彝アトリエ記念館が開館。茨城県立美術館の敷地内にも中村彝アトリエが復元されており、隣接する県民文化センターには絵筆を持つ中村彝の巨大な銅像がある。伊豆大島には中村彝記念碑が建立されている。

◇ 新宿中村屋 と 館山中村屋 ◇

1901（明治 34）年、相馬愛蔵・黒光夫妻は東京本郷の東大正門前にパン屋を開いた。後に新宿に出店、中村屋サロンを開いて若い芸術家を支援した。インドやロシアからの政治亡命者などを庇護した。13 歳からパン職人となった一番弟子の長束實は、1919（大正8）年に本郷店を譲られたが、1927（昭和2）年に館山に出店、全国唯一の暖簾分けとして独立が認められ、「館山中村屋」の看板を掲げた。市民には今なお〝なかパン〟の愛称で親しまれている老舗である。その縁を物語るのが、2つの中村屋に共通するチキンカリーやロシアケーキなどのメニューである。館山駅前にある本店2階の喫茶室には、ゆかりの画家・中村彝の『海辺の村（白壁の家）』複製画をはじめ、季節ごとに著名な画家の作品が展示される「まちかどミニ美術館」である。

◆多々羅（たたら）義雄 1894（明治 27）～ 1968（昭和 43）

『房州布良ヲ寫ス』　千葉市立美術館蔵

福岡県能古ノ島生まれ。1910（明治43）年、亡くなる前年の青木繁に佐賀で出会い洋画を学ぶ。翌年16歳で上京。太平洋画会研究所で満谷国四郎に師事する。1922（大正１１）年頃に布良で描いた『房州布良を写す』-千葉市美術館蔵- は、中村彝の『海辺の村（白壁の家）』と同じ構図とモチーフを描いたものと考えられる。1950（昭和25）年に太平洋画会代表となり、1952（昭和27）年に光陽会を設立。